日本語のキーワード

現代語・古典語

キーワードを追って
ことばの核心に迫る

日野資純 著

東宛社

著者略歴

日野資純（ひの・すけずみ）

1926（大正15）年　東京に生まれる。

1951（昭和26）年　東京大学文学部国文学科卒業。

静岡大学を1989（平成元）年に定年退職後、1996年まで静岡英和女学院短期大学教授。

主要著書『方言学論考—観察と実践—』（1984年）

『日本の方言学』（1986年）

『基礎語研究序説』（1991年）

『古典解釈のための基礎語研究』（1996年）

現住所　静岡県静岡市北安東3 - 22 - 5

日本語のキーワード—現代語・古典語—　© 2000

2000年9月30日　第1版発行

著者　日野資純

発行者　梶林正次

発行社　株式会社　東宛社

〒101 - 0047 東京都千代田区内神田3 - 4 - 7

電話　(03)3252 - 4721

振替　00110 - 5 - 66059

印刷　ティエフビー

ISBN4-924694-43-6　C0081

日本語のキーワード

―現代語・古典語―

日野資純 著

江苏工业学院图书馆
藏书章

装幀　中井繁デザイン事務所

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

まえがき（この本の目的）……7
I キーワードとその必要性……19
—現代語・古典語・方言に共通の語—
II キーワードの実例とその分析……27
A 総論……28
—ウエ・カミなどを例として—
B 現代共通語のキーワード……44
1 現代共通語とは？……44
2 アト／ノチ —「あとで」と「のちほど」のちがいなど—……45
3 シタ／モト／シモ —「足のシタ・足モト・シモ半期」など—……63
4 ヤル／スル —「ヤル気十分」はよいが「スル気十分」はなぜおかしい？—……74
C 現代の方言のキーワード……93
1 現代の方言とは？……93
2 デカイという語はどのようにしてできたか？……94
D 古典語のキーワード……118

1　古典語とは？……118
2　イヘ／ヤ ―家（イヘ）に来てわが屋（ヤ）を見れば（万葉集）― ……119
3　ウチ／ナカ ―「かくあるうちに」と「あまたがなかに」（土左日記）― ……144
4　ヨ／ヨル ……160
―「ひとよ（一夜）」はあるが「ひとよる（一夜）」のないのはなぜ？―
E　方言のキーワードが古典の読解に役立つ ……185
1　はじめに ……185
2　方言形ヨッピテから古典語「よひとよ（夜一夜）」の解釈へ（「よもすがら」も含めて） ……186
第1表（古典文学作品中のキーワードの実数） ……202
第2表（現代の方言におけるキーワードの分布） ……203
表の内容についてのコメント ……209
クイズ ……222
ことばの生活の中のキーワード ……236
参考文献 ……240
あとがき ……244
引用単語索引 ……253

まえがき（この本の目的）

どんな言語でも、時間がたてば変化してゆく。読者の皆さんのご家庭でも、ご両親のことばは皆さんと少しちがうし、さらに、祖父や祖母にあたるかたのことばは、もっとちがっている。――こういうことに気がつくことがあると思う。

私は一九七八（昭和53）年に、静岡県駿東郡小山町で、一九〇〇（明治33）年生まれの男性に教えてもらったが、「今、何時？」というのを、昔は世代によって、次のように言いわけていたというのである。

・安政生まれの曾祖母（ヒイバアさん）
イマ、ナンノコク（何の刻）？

・自分
イマ、ナンドキ（何時）？

・自分の子
イマ、イクジ（幾時）？

・自分の孫

イマ、ナンジ（何時）？

このように、一つの家庭の中で考えても、ナンノコク（何の刻）、ナンドキ（何時）、イクジ（幾時）、ナンジ（何時）のように、年齢によってことばが変わってゆくことがわかる。

過去の日本語を記した文献は大体七世紀ごろからのものが残っており（『古事記』は八世紀）、英語では、古英語 Old English（OE）の記録が八世紀ごろからあるというが、日本語で考えても、八世紀の古事記・日本書紀・万葉集などのことばを現代と比べれば、当然のこととして、大きなちがいがある。

例えば私は、「あをによし」は奈良という地名にかかる枕詞だということを、学生時代に懸命になって覚えようとした記憶があるが、苦労しなければ覚えられないほど、現代人には枕詞（万葉集などに使われたような）というものが、なくなっているのである。

こういうことばは、学校の授業でも特別に注意して教えられるので、覚えるのは当然だと考えられているが、古典を理解しようとする時に、学校教育でも、生徒・学生の自覚という点でも、意外に見のがされていることばがある。

それは昔から今まで、ごく普通に使われている「やさしい」、いや、「やさしそうに見えて実はむずかしい」単語のことである。

この本で扱う「キーワード」とは、そういうものをさすのである。

それではなぜ、そういうものに改めて注目しなければならないのだろうか。

その理由は、本文でわかりやすく述べるつもりだが、現代のことばや古典のことばを理解しようとする時に、すぐにも問題になることを、一つだけ実例で示してみたい。

平安時代の末、院政期の成立とされる『今昔物語集』という説話集は、教材として高等学校で学習されることも多いので、近ごろでは一般にもかなり親しみやすい作品だが、漢字が中心で、ふりがなはなく、送り仮名などを片仮名で記してあるために、一つ一つの漢字をどう読めばよいのか、はっきりしないことがある。また送り仮名もない場合には、つい現代人の感覚で読んでしまうことになるが、それが本当に、成立当時のよみであるかどうかは、わからないことが多い。

こういう点につき、今までに出版されている注釈書で、訓のわかれている例をあげてみよう。

今昔物語集（巻十二・第二十四話）に、釈迦以前に生まれた迦葉仏（カショウブツ）という仏が、牛となってこの世に現れるという話が出ているが、その牛が死んだ時、牛小屋から少し高い場所に土葬したという状況を、次のように記している。

①人皆返（カヘリ）ヌレバ［念仏を唱えていた人々が皆帰ってしまったので］、牛ヲバ牛屋ノ上ノ方ニ少シ登（ノボセ）テ土葬ニシツ。（今昔物語集（1）、新216、旧276）

（注）本書引用の古典は、原則として日本古典文学全集（小学館刊）により、引用部分のページを示した。「新」は『新日本古典文学全集』、「旧」は『日本古典文学全集』。このシリーズは、古典の本文と現代語訳が対照させてあるのでわかりやすい。ただし『今昔物語集(3)(4)』は「新」が校正時未刊のため「旧」によっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この注釈書で「上ノ方」のよみは、カミノカタである。

ところが別の巻（巻二十九）の第三十二話で、同じ「上ノ方」という表記が現れているが、ここでは同じ注釈書が、ウヘノカタ（ウエノカタ）とよんでいる。

こちらの話の展開は、次のとおりである。

陸奥の国（現在の青森・岩手・宮城・福島各県の一帯にあたる）の男性が、家に沢山の犬を飼いならしておき、深い山に連れていっては、イノシシやシカにかみつかせて猟をしていたが、ある時、猟に時間がかかりすぎて山で夜を明かすことになった。すると、他の犬はよく眠っているのに、一匹だけが急に起きあがり、主人の眠っていた大木の空洞の中で、大声でほえ出した。

主人は驚き、太刀を抜いておどしたが犬はなきやまない。犬にかみつかれそうになったので、空洞から外へとび出した時のことが、次のように書いてある。

②主、「此ル狭キ空［＝空洞］ニテ此ノ奴咋付ナバ［こいつが私に食いついたら］悪カリナム［＝どうしようもない］ト思テ、木ノ空ヨリ外ニ踊出ル時ニ、此ノ狗我ガ居タリツル空ノ上ノ方ニ踊上テ物ニ咋付ヌ。

（今昔物語集（4）、旧433）

つまり、男が出た瞬間に、犬も木の幹の空洞の外側の、上部の方にとびあがって、何か、えたいの知れぬものに食い付いた。空洞外側の空間の、上方に向かった部分のことをウヘノカタ（ウエノカタ）と呼んでいることになるが、ここで先に引いた巻十二の話の「上ノ方」と比べてみるとどうなるだろう。

巻十二の①の例では、牛小屋のあった場所より上方の、少し高い所をさして「上ノ方」と称していたのだが、②の犬の話でも、木の幹を上部の方向にたどった所を「空ノ上ノ方」と言っており、その「上ノ方」の「上」は①と同じ意味と考えてよい。ところが前者ではカミノカタ、後者ではウヘノカタという訓になっていて、たがいに食いちがっているのである。

このほか、この巻二十九のこの部分については、『完訳日本の古典32・今昔物語集三・本朝世俗部』（一九八七年、小学館刊）の訓でも「うへのかた」となっており、カミノカタよりウヘノカタの訓の方が、優勢である（同書271ページ）。

それにしても、ほとんど同様な用法なのになぜ、このような訓のちがいができてしまうのだろうか。

それは、現代日本語として、カミとウエという二つの語の意味のちがいがそれほどはっきりとは区別されなくなっているために、古典の注釈をする研究者の間でも、そのちがいを厳密に区別しようという配慮がなされず、右のような訓の不一致ができてしまうのだ。こういう語が解釈のさいのキーワードの例となるのである。

ではこの場合、どう考えればよいのか。

（1）この場合、「上」をカミとよんでもウエとよんでも、話の筋はわかるのだから、どちらでもよい。

（2）今なら、ウエノホウと言うだろうから、ウエノカタでよかろう。

（3）ことばというものは、時代によって意味が変わることがあるから、このころ、カミという語はど

ういう意味で、ウエという語はどういう意味だったかを、きちんと確かめてから、どちらによむかを決めるべきである。もちろん、それには、同じ時代あるいは近い時代の作品から適当な用例を拾って比較する必要がある。

右のうちで、（1）について言えば、たしかにこのままでも大筋はわかるかもしれないが、のちに記すように（22ページ）、単語というものは、言いかたがちがえば、必ず、少しずつ意味がちがってくるので、この態度は科学的ではない。さらに言えば、今昔物語集の時代に、カミという語、ウエという語は、それぞれ固有の意味と用法をもっていて、互いに混同することがなかった。このことは、この二語の科学的実証的研究の結果としてはっきりしているので[注]、作者は、必ずどちらかの語（カミ・ウエ）を念頭において、この話を書き記していたと考えられる。そうであるなら、現代人としてここをよむ場合にも、できるだけ当時のことばに即してよむのが正しい態度である。

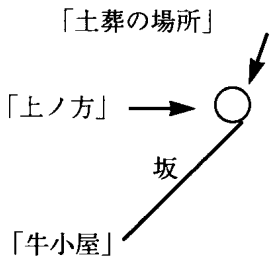
（2）について言うと、ことばは時代とともに、語形も意味も変化してゆく可能性のあるものだから、現在のことばそのものが、昔からずっと続いていると考えてしまうと、正しくないことがある。（もちろん昔から今までほとんど意味の変わらないことばもあるが、実際問題としては、「変化する可能性があること」を常に念頭に置く必要がある。）

それでは、右にあげた例文①と②の「上ノ方」（9・10ページ）の「上」のよみを決めるには、どうい

（注）本書末尾の参考文献（246ページ）A・Bなどに述べてある。

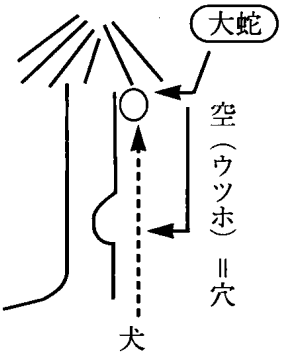
う手続きをふめばよいか。［11ページ（3）がその手続き。］

まず、①では、牛小屋から少し高い場所へと登った所で牛を土葬にしたのだから、牛小屋と、土葬の場所との位置の関係は、上の図のようになる。つまり「土葬の場所」は、牛小屋に対して「斜め上方」にあったのである。



これに対して、②では、犬の主人の入っていた穴から垂直に上方の、幹の一部にひそんでいたもの（実は大蛇）の所まで、犬が踊りあがって食いついたのだから、犬と、「上ノ方」の関係は左の図のようになろう。

現在なら、どちらにしてもウエノホウと言えばすむのだから、何とも回りくどいと思われるかもしれないが、そこが問題なので、もう少しがまんしてほしい。



そこで、①の「上ノ方」のよみを決めるために参考となる例文を、平安時代の『大鏡』から引いてみよう。

『大鏡』は院政時代の初めごろ（一〇八六年前後）に成立した歴史物語で、文徳天皇から十四代めの後一条天皇・万寿二年（一〇二五年）までの歴史につき、藤原氏の権力者を中心として、それを大宅世継（おおやけのよつぎ）という者が語るという形で展開するが、その中の藤原道長についての話に、次

のような場面がある。

③…大炊御門より西ざま［＝西方］に、人々のささと走れば、あやしくて［＝ふしぎに思って］見さぶらひしかば、わが家のほどにしも、いと暗うなるまで人立ちこみて見ゆるに、いとどおどろかれて、焼亡か［＝火事か］と思ひて、上を見あぐれば、煙も立たず。（大鏡・太政大臣道長下）［新368、旧374］

この話の語り手である「世継」の父が、天慶八（西暦九四五）年二月三日に、伏見稲荷にお参りしたその夜、人々があわただしく走り騒ぐので、「火事か」と思って、「かみを見あぐれば」という展開になる。つまり、このころは「ウエを見上げる」でなく、「カミを見上げる」と言ったのである。（ここの「上」という表記は、もと「かみ」という仮名がきだったことを示す。）

そしてこの場合、自分の家の方角を見上げたのだから、空間を、いわば斜めに見上げたことになるが、ここで、①の例文のところで示した「牛小屋」と「（牛を）土葬した場所」との位置関係を考えてみよう（13ページ）。「牛を、牛小屋から少し登った所に土葬した」と書いてあるのだから、「土葬した場所」は「牛小屋」から、ちょうど見上げられるくらいの位置にあったと考えてよい（もちろん、実際に見えなかったとしても、ここでは問題にならない）。それなら、大鏡の「上を見あぐれば」という表現に基づいて、①も、「牛屋ノ上（カミ）ノ方ニ……土葬ニシツ」とよめることになる。

次に、②の「上ノ方」はどうだろうか。

ここは、先に記したように、空間を垂直に、上方へ向かって、犬が踊り上がったのであるから、①の

ような「斜め」ではない。こういう場合もカミノカタでよいのだろうか。これについては、源氏物語の夕顔の巻に、適切な例文がある。

源氏の君は数え年十七歳の夏、乳母（実母に代わって乳児を育てる人）の子・惟光の世話で、乳母の隣に住む美女・夕顔を見そめ、八月十五日（旧暦）の夜、ある荒れはてた住居で一夜をすごすのであるが、その夜ふけ、二人の枕もとに一人の美女が現れ、嫉妬にみちたことばとともに夕顔をゆりおこそうとする夢を見る。目を覚ましてみると、すでに夕顔は、魔物に正気を奪われたようになって、息が絶えていた。

源氏はやっとのことで、留守番役に明かりを持ってこさせる。その薄暗い明かりの中の、部屋の様子が次のように描写してある。

④灯はほのかにまたたきて、母屋の際に立てたる屏風の上、ここかしこのくまぐましくおぼえたまふに、物の、足音ひしひしと踏みならしつつ、背後より寄り来る心地す。惟光とく参らなんと思す。

（源氏物語 (1)・新169、旧243）［この「上」も、もと「かみ」と仮名がき］

燭台の灯がかすかにちらちらと光る中で、その家屋と外とのさかいの所に立ててある屏風の上方のあちこちが、そこまで光がとどかないので暗く感じるのだが、その時、何か、えたいの知れない者が、足音をみしみしと踏み鳴らしながら、うしろから自分の方へ寄ってくるような気がする。

このように、「屏風のかみ」は、まさに、その「真上（マウエ）」なのだが、これもカミである。大切

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com